

## 5-2 分子スケールナノサイエンスセンター

平成14年4月よりナノスケールの分子構造体科学の研究を推進する分子スケールナノサイエンスセンターが発足した。これは、以前の分子物質開発研究センター（旧物質センターと略）の助教授と分子集団研究系、電子構造研究系、および錯体化学実験施設からの教授・助教授が合流し、新たに認められた教授のポジションを大部門に配置することによって、系やセンターの枠を越えた新しい組織として誕生した。陣容がまだ固まっていないこともあり、茅幸二所長がセンター長の事務取扱として着任し、研究系およびセンターの教授が運営を助ける体制を取っている。

本センターは、3つの大部門と2つの流動部門から構成される。大部門における教授・助教授の数は3名以上であり、研究計画に応じて流動的な構成が可能である。「分子金属素子・分子エレクトロニクス研究部門」には、有機合成の手法を活かしたナノデバイスの研究を行われる小川琢治教授が平成15年2月より着任され、分子集団動力学部門から有機半導体素子やナノリソグラフィ研究の尋田博一助教授が、旧物質センターから分子素子材料開発研究の鈴木敏泰助教授が参加している。「ナノ触媒・生命分子素子研究部門」には、錯体化学実験施設から錯体化学やナノ触媒研究の魚住泰広教授が11月より着任し、旧物質センターから分子組織体合成研究の永田央助教授が配置された。またもう一人の助教授は15年度着任予定となっている。「ナノ光計測研究部門」の教授は15年度の春にも着任される予定であり、表面のナノ構造の計測開発の研究を展開されるであろう。この部門には電子構造研究系からナノクラスター粒子研究の佃達哉助教授が加わるとともにシンクロトロン放射光光源研究の専任教授が配置される予定である。また、流動研究部門である「界面分子科学研究部門」では、山梨大学から触媒表面科学の小宮山政晴教授が、千葉大学から放射光科学の奥平幸司助教授が着任されているが、平成15年度からは新しいメンバーと交代される。また、「分子クラスター研究部門」では広島大学から谷本能文教授が強磁場中での特異な構造体発生の研究を、静岡大学からの石田俊正教授が分子包接体の理論的研究を行っている。

平成15年の秋にはE地区にナノサイエンスセンター棟が竣工する予定であり、いよいよ本格的な活動が期待される。